

事例4 ジェネリック・スキル獲得への第一歩

同志社大学社会学部

相互啓発による創造的学力育成カリキュラム

学生が学生を教えるチューター制で、主体性を育む

専門教育を損ねることなく、同時に人間的な成長も促す教育カリキュラムの実現に向けて、同志社大学・社会学部では四年一貫して学生の目的意識を探求するプログラムに着手しました。その柱となるのが、学生によるチューター制です。

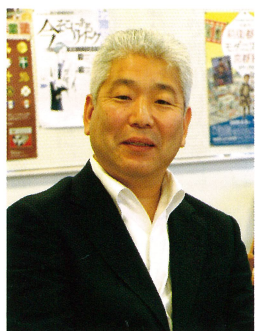
専門性と社会的能力の両立を目指す

同志社大学社会学部ではこの春から、1・2年次生の授業に、同じ学部の先輩がサポーターとして参加するチューター制を導入しています。導入する科目は、1年次の導入教育であるフューチャーセミナーや専門の基礎科目などで、チューターの人数は学生20人に1人という割合。チューターには、教員の補助というだけでなく、より積極的に後輩の勉強を手伝うことが期待されています。後輩にとっては気軽に

に質問・相談できる存在となり、先輩にとってもアドバイスする立場になることで自らの学びを深め、人間的な成長にも繋がるチューター制。学生が相互に啓発しあい成長できる環境作りを目指しています。

この制度は、昨年末から社会学部で始まった「相互啓発による創造的学力育成カリキュラム」の柱となる取組みです。同プログラムは、専門教育の重要性を十分に認識した上で、なおかつそれを支える基礎学力やコミュニケーション能力を高めることを目指しています。

「本学部は、社会学・社会学福祉学・メディア学・産業関係学・教育文化学の5学科を擁しており、また学生10



鴫飼 孝造 教授
「本学部の時代は、大学で学ぶ専門性をそのまま社会で生かすチャンスはなかなかありません。ないか、という問題意識がありました。」



左から・高橋さん、鈴木さん

だから、専門性だけではなく、社会で必要な力も身につけなければならぬ。これまででそういった能力は、ゼミの先生が個別に学生に伝えたり、正課以外の部活やサークル活動の中で学ぶという形ではかやっつてこなかった。その部分により意識的に取り組もうというプログラムです。」

試行錯誤から生まれる主体性

社会学科3年の鈴木恵子さんと高橋おかりさんは、この春からチューターを始めています。受け持つ科目は、鈴木さんが社会調査入門、高橋さんは社会統計学と教育社会学の2科目です。



「教授と多く関わる良い機会だと思いましたが、また、教える側の立場を体験してみたいという興味もありました」という鈴木さんは、始まったばかりということもあり、いろいろと苦労があるといいます。

「グループワークをするときに、各グループの様子を見て、うまく進んでいないようであれば声をかけますが、『自分たちでやる』という思いが強いようで、『別に大丈夫です』と言われる経験があります。私はアルバイトの経験があるので、割り当てられた仕事をこなすアルバイトと違って、チューターは自分で工夫して仕事を探さなければならぬということを実感しています。他のチューターや先生とも話し合っつて、どう工夫していくか、これから頑張ろうという気持ちです。」

一方の高橋さんは、「一度受けた授業をもう一回聞けるのは、自分のためにもなる」という理由でチューターになりました。

「社会統計学の授業は、計算など答えが決まってる内容も結構あるので、その部分は教えやすいですね。また私自身が昨年受けた授業なので、自分の経験と照らし合わせて授業の改善点を先生に伝えたりもしています。また、授業がよく分からない学生も多くい

らと思います。私自身がそうでしたから(笑)。そういう後輩たちが授業後にフォローできる環境ができないか、と他のチューターと話し合っています。」

自分の言葉で他人に説明できる力

まだまだ試行錯誤の感もあるチューター制ですが、鴫飼教授はそれも一つの学びだと考えています。

「先生に細かく指示をもらうのではなく、それぞれのチューターが、色々悩みながら自分の仕事を自分で見つけていってほしい。それができる人材は社会的にも求められていますし、広い意味でのキャリア教育という意味も、このチューター制には込めていますから。

理想としては、授業時間以外の時間で、の予習や復習、あるいはレポートや小テストなども、先輩と一緒に見れば後輩の勉強をサポートする、という状態にしたいと考えています。」

最後に、鴫飼教授が考える「創造的学力」について伺いました。

「自分が学んだこ

